

1, Todo tan cerca: すべてが手の届く場所に

凍り付いて固まった景色の真ん中を過ぎてきたみたいに、あの頃の思い出は僕の中に刻まれている。そのイメージたちは一砂漠の砂丘が崩れていくのを眺めているような優雅なあせりとともに一、ゼラチンの塊みたいにゆっくりとすべり落ちていった。

実際には起こらなかったことが、まるで現実の出来事のように深く僕の記憶に刻まれたことをその後も決して忘れることはなかった。

これは、本当に起こったかどうかははっきりわからない“ひとつの愛の記録”。日々に、会うたびにごとにすべてが通り過ぎていった。一“歓喜”とも“孤独”とも誰も名づけることができない感情の節制と抑制をもって。

君と一緒にいるとき、僕らに起こった日々の出来事を話しながら、君のコーヒーに砂糖の粒が溶けていくのを目で追いながら、僕の視線は君の唇で迷子になってしまった。

そして、君がスプーンを持つ手際、その先にあるものに思いを寄せた。

両親の恋人時代の写真を見ているような感じに似ていた。君の慎ましやかさ、隠し切れないう優雅さは、よく撮れたモノクロ写真のような親近感と清らかさを含んでいた。

街の風景はすぐさまにバー、レストラン、カフェで満たされ、僕らをまるで我が家であるかのように迎え入れる。こんなにたくさんの人に囲まれながら、孤独を感じるのは初めてだった。見つかりもしないものをこんなに躍起になって探すのは初めてだった。そして何よりも、会うたびに、今まで感じたことのないような疲労感に襲われた。

過去の記憶は一それが僕たちのものである限り一何ひとつとして苦い記憶としては残っていない。僕たちが過ごした日々は、恋に落ちた二人が望むものすべてを包括していた。まるで三ツ星レストランのデザート台のように。

僕らをびったりな組み合わせにめぐり合わせた確立の法則。この世に存在するものを僕らが名づけたもので新しい辞書を満たしていくイノセントな約束。“聖なる目的”を見つけ出していく緩やかな速度。欲望に形を変えていく好奇心の表現の振動。呵責の海に橋を架けていく終わりのないゲーム。そして恐れ、熟れきった果実一世界が始まった瞬間から求められてきたもの一に手を伸ばすことに対する押され切れない恐怖感。

なにもかもうまくいっていたわけじゃない。だけど、たくさんシルクとビロードに包まれ

ていて、それらはすべて僕らの眼差しへと形を変えた。

自分の皮膚が、皮膚からできたものでなくなったとき僕はそれを持ってどうすればいいんだろうか。それは言葉になることができるかもしれない。音楽を生み出すべく。テノールサクスのハーモニーを帯びるべく。

びっくりして見つめる。踊り、ターンをする。期限が切れ、孤独で、あせりに満ちた愛の表現たちを刻みながら。

あなたに近づこうとしないのは、すでにあなたがとても近くにいるから—君は言った。

僕はモーターを止め、ろうそくを消した。追い風が吹いているか確かめるために。

5, Un dia inquieto:じっとしてられない日

怪我ってどんなものだったろう。傷口が開いて、じっとしてられない。なぜなら回復しそうにもないから。くすぐたくて眠ることができない。治ってほしいと思う、こんなままじゃられない。

怪我の原因はとある事故にあつて—解釈の仕様によってはその原因は素晴らしい出来事ととれるかもしれない—まったく思いもよらなかったけれど、僕が“生きている”ことを思い出させる。その事故に遭うまでは、理解するのは困難かもしれない。

その“事故”から僕の周りにあるものは形を変えた。僕はもう以前の僕じゃないけれど、僕の中では何も変わらない。

手を伸ばすと傷が痛む。なぜなら君を見つけ出せないから。

君を見つけ出すこと、君が存在しているということを知ること、それがすべての始まり。

手を伸ばす、まるで手足を失ったかのように、自分が不完全に感じる。君を見つけ出せないから。“君がいない日”は僕の怪我だ。

今晚あなたの名前を声に出してみた—君は言った。

それは間違いなく、僕が目を覚まして暗闇に腕を伸ばした瞬間だったに違いない。くすぐったかったのはそれが初めての抱擁だったから。